

### 【旧約聖書日課】出エジプト記 22章20～26節

<sup>20</sup>寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。

<sup>21</sup>寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。<sup>22</sup>もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。<sup>23</sup>そして、わたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。

<sup>24</sup>もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようにしてはならない。彼から利子を取ってはならない。<sup>25</sup>もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。<sup>26</sup>なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。

### 【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 12章9～21節

<sup>9</sup>愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、<sup>10</sup>兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。<sup>11</sup>怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。<sup>12</sup>希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。<sup>13</sup>聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。<sup>14</sup>あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。<sup>15</sup>喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。<sup>16</sup>互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。<sup>17</sup>だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。<sup>18</sup>できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。<sup>19</sup>愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。<sup>20</sup>「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」<sup>21</sup>悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 10章25～42節

<sup>25</sup>すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」<sup>26</sup>イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、<sup>27</sup>彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」<sup>28</sup>イエスは言われた。「正しい答えた。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」<sup>29</sup>しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。<sup>30</sup>イエスはお答えになった。「ある人がエ

ルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。<sup>31</sup>ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。<sup>32</sup>同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。<sup>33</sup>ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、<sup>34</sup>近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。<sup>35</sup>そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』<sup>36</sup>さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。<sup>37</sup>律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

<sup>38</sup>一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。<sup>39</sup>彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。<sup>40</sup>マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」<sup>41</sup>主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。<sup>42</sup>しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

## 「平和があるように」【こども説教のために】

主イエスが七十二人の弟子たちを町や村に遣わされたのは、まず何よりも、「平和」を告げさせるためでした。「どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい」(ルカ 10:5)。もちろん、「平和の挨拶」を送っても、「平和の挨拶」で返してもらえないことがあります。主イエスも、サマリア人の村に入られたときには、歓迎されませんでした(同 9:52～53)。「平和」は、相手のあることです。互いの間にある隔ての壁が取り除けられて、互いを受け入れ合うこと、と言ってもよいでしょう(エフェソ 2:14～17)。ところが、残念ながら「平和」を実現することが難しい場合もあります。

それでも、そういう相手と「平和」を実現する可能性がないわけではありません。「愛する」ことによって、相手が変わることがあるからです。

「わたしの隣人とはだれですか」と問うた人に、主イエスは、たとえをお語りになりました。サマリア人は、ユダヤ人と敵対していましたが、追いはぎに襲われたユダヤ人を憐れんで助けたならば、その人の隣人になったのだ、ということです。それが、「隣人を愛する」ことだということです。その決断には、勇気が必要です。それは、自分が損しても相手に与えることかもしれません。けれども、その「隣人愛」から「平和」が始まるのです。

## 「すべての人と平和に…」

今日 8 月 6 日は、「広島原爆の日」。日本基督教団の「平和聖日」は、もともと、この日に定められることを広島を中心とした諸教会（西中国教区）が求めたことから始まりました。たしかに、原爆や水爆など核兵器は、人道に反する絶対悪だとする見方があります。けれども、人道的な兵器と非人道的な兵器と、どこで線引きが可能なのか、わたしは正直わかりません。兵器はすべて非人道的だと言う人もいるでしょう。けれども、兵器を用いなければ人道的かと言えば、そういうわけでもないでしょう。わたしたち人間は、兵器などを用いなくても、恐ろしく非人道的なことをやってのけることがいくらかでもあるのです。ただ、そのことをあまり自覚していないのです。

わたしの祖父は、新聞記者でしたが、軍人の身分でフィリピンに従軍し、1945 年の「ルソン島の戦い」で敗走、山中で戦病死したとされています。43 歳のときでした。戦時中の自分の考えたことなど何も書き残していませんから、どのような思いで従軍していたのか、わたしは想像するばかりです。この話は、母から繰り返し聞かされてきました。子どものころ、それは決まって 8 月 6 日でした。母は、終戦まで兵庫西宮の甲子園球場近くに住んでいました。祖父の野球好きが高じて甲子園球場の近くに住んでいたのだそうです。西宮市は、8 月 5 日深夜から 6 日にかけて空襲を受け、壊滅しました。母は家族と共に甲子園球場に避難し、そこで広島の新型爆弾投下の報を聞いたと言います。しかし、母にとって、8 月 6 日は「広島原爆の日」ではなく、自分の父親の生きた痕跡が奪われた「空襲の日」なのでしょう。

パウロは、「**できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさない**」と勧めています。それが具体的にどのような生き方であり、人とののかかわり方であるのかは、この前後に具体的に記されています。その勧めは、もしかすると、「平和」を高々と掲げて「平和の戦士」であることを自認する者には、もの足りない内容かもしれません。内容もそうですが、パウロは、「**できれば、せめて**」と言うのです。自分たち以外の者が同じように行動することを諦めているのです。何とも消極的な「平和」行動です。これで、世界から戦争がなくなるのでしょうか。ローマ帝国が強大な軍事力で秩序を保っていた時代で、「ローマの平和」と称されました。パウロのような姿勢では、「ローマの平和」に到底太刀打ちできないように思えます。パウロのことを、権力者に迎合的だと非難する人もいます。そうかもしれません。けれども、パウロは、もっと地に足を着けたことを考えていたのではないのでしょうか。主イエスの始められた「平和」運動は、人々を束ねて大きな運動体を作っていくことではなく、一人ひとりが、「あなたはどうするのか」という問いに答えていくようなものだった、とパウロは理解していたのではないのでしょうか。

## 「行って、あなたも…」

主イエスとの対話で「よいサマリア人のたとえ」を聞かされたのは、ある**律法の専門家**であったと紹介されています。この人のことは詳しく知られていませんが、文脈からすると、すでに弟子として主イエスに従っていた可能性があります。もしかすると、主イエスから宣教に派遣された七十二人のうちの一人であったかもしれません。

「**隣人を自分のように愛しなさい**」と言われるとき、「**わたしの隣人とはだれですか**」と問うのは、自然なことです。福音書は「**彼は自分を正当化しようとして**」と、少し意地悪く描いているように見えますが、要は、彼は「**隣人を愛する**」ということを完全にまっとうしたいと考えていた、という意味です。「**隣人**」を一人も見落としてはいけない、見過ごしてはいけない、忘れてはいけない。そんな真面目な姿勢が、「**わたしの隣人とはだれですか**」という問いになったのでしょう。

この人は、「よいサマリア人」のたとえを聞いて、納得したのでしょうか。「**だれがその人の隣人になったと思うか**」と問われて、「**その人を助けた人です**」と主イエスの期待された通りの答えを口にした彼は、「**行って、あなたも同じようにしなさい**」という主イエスの呼びかけに、どのように応えることになったのでしょうか。もしかすると、相変わらず、「**自分の隣人**」を掘り出すことにあくせくして、不安な思いを持ち続けていたのかもしれません。物事を大きくとらえすぎて、多くのことに思い悩んで、結局、本来大切にすべきことを見失ってしまう、というのは、よくあることです。

そのような彼が、主イエスと共にマルタとマリア姉妹の家に滞在したのだとしたら、彼は何をそこで教えられたのでしょうか。

マルタとマリア。マルタは、よく動き、よく働き、もてなしに長けています。マリアは、そうではありません。主イエス一行をもてなすために、マルタは忙しく立ち働いたのでしょう。マリアにも手伝ってもらいたかったのです。彼女は、マリアのように主イエスの話を聞きたいとも思っていたでしょう。そして、多くの気遣いをしなければと考えると、思い悩みました。主イエスは、もちろん、そのマルタの働きを認めているのです。彼女にもマリアのようになれ、などとは一言も言いません。「**必要なことはただ一つ**」と言われるのです。「**求められていることは一つ**」と言われるのです。「**マリアは、自分の求められていることを一つ、選んだ。マルタ、あなたも自分の求められていることを一つ、選んだらよい**」。

一つ、また一つ。そのようにして、わたしたちは、隣人を愛する。そして、そのようにして平和をつくり上げていくのです。それが、主イエスの始められた平和、使徒たちが受け継いだ平和のあり方です。